

ケアの現場で何を学ぶか？

—社会福祉と教育の視点から—

(社会福祉法人 幸福創造) 金玄勲

(社会科教育講座) 魁生由美子

What is learned in the field related to Care?

—From the angle of Social welfare and Education—

Hyun Hoon KIM and Yumiko KAISHO

(令和元年9月2日受理)

抄録：日韓が直面している人口減社会では社会福祉と教育を含む広義のケアの担い手をどのように育てていくのが喫緊の課題となっている。次世代を担う学生たちは支援を必要とする人々とどのように出会い、どのように学ぶことができるのか。社会福祉および教育の現場の視点にもとづき経験的に論ずる。

キーワード：ケアの倫理(Ethics of care)、関係性(relationships)、ボランティア(volunteer)

1. はじめに

2018年9月、総務庁は敬老の日にちなみ、日本の全人口に占める65歳以上人口の割合、すなわち高齢化率が過去最高の28.1%であると発表した¹。日本は世界で突出した少子高齢化が進行中であり、超高齢社会の先進地である。その一方で、韓国においては日本以上のスピードで低出産と高齢化が進んでいる。2018年、韓国の合計特殊出生率が0.98に落ち込んだことを受けて、統計庁は5年ごとに行う将来人口推計を前倒しにし、2019年3月に「将来人口特別推計 2017~2067年」を発表した。2016年の段階では出生率と寿命を低く見積もる「低位シナリオ」

で、早ければ2023年から人口減が始まると予測していた。この予測を上回って低出産が進行したため、今回の「低位シナリオ」では人口のピークが2019年にまで前倒しとなり、その後の人口減が見込まれることとなった²。

日韓両国は社会保障と教育に重点的な国家予算の支出を行わないという点でも共通している³。人口減社会の低予算福祉において、高齢者、女性・子ども、障がい者等々、日々ふつうの生活を送るために支援を必要とする人々を、誰がどのように支援していくのが、今まさに問われているのである。利用可能な資源を総動員して、他人事を自分事に引き寄せな

がら、そして自分事を上手に社会に繋げながら持続可能な地域の暮らしをつくっていくことが、日韓が共有する喫緊の課題である。

本稿では、まず金が社会福祉を实践する現場の視点から、ケアの現場において、支援を必要とする方々と学生たちがどのように出会い、どのように学ぶことができるのか、具体的経験に則して記述する。次に、魁生が教育学部で教師を目指す学生たちがふだんの授業や、教員免許の取得のための「介護等体験」等で何を学ぶことができるのか、課題と展望を提示する。

2. ケアという営為

日本と同様に、韓国においても社会福祉士をはじめとする資格を取得するために福祉系大学等の教育機関において社会福祉関連科目が開設され、高校から進学した若い学生たちはもちろん、福祉の現場で経験を積んだ社会人学生等、多様な学生たちが学んでいる。筆者が日本への留学から帰国した直後である 1997 年、小さなアパートの一室で身寄りのない高齢者を支援する活動から始まった社会事業は、現在、ソウル市恩平区を拠点とする社会福祉法人幸福創造に引き継がれ、地域の福祉課題を網羅する事業へと拡大してきた⁴。近年、少子高齢化、コミュニティケアの整備等を背景として地域福祉は新たな脚光を浴びている。筆者は韓国および日本の大学において講義、学生指導等を行っているが(図 1)、現在の仕事の主軸は地域福祉の实践とマネジメントである。



図 1 漢陽大学大学院ゼミナールの様子(魁生由美子撮影、於：韓国漢陽大学、2019 年 3 月 21 日)

社会福祉法人幸福創造の代表のほか、韓国在宅老人福祉協会、恩平区社会福祉協議会、その他団体の会長職、そして韓日の社会福祉に関する交流事業等多方面にわたる業務を行っている。そのような立場上、ケアを担う現場の視点から著書や新聞等のさまざまな媒体、講演会を通じて社会的に発言する機会は多い。本稿では、韓日における社会福祉研究およびソウル市恩平区という一つの地域に特化して展開してきた社会事業の实践にもとづき、これからの社会福祉や教育を担う学生たちに学んでほしいことを経験的に記述していきたい。

韓国から海外への留学がようやく一般的になり始めた 1980 年代後半、飯盒とバーナー、寝袋と 1 ケースのラーメン、コチュジャン、そして日本語辞書だけを携えて渡日した。寝るところがなければ公園で寝袋を使って寝ることがあっても、社会福祉を学ばねばならないという一念であった。日本語学校に通いながら進学を準備した結果、念願がかない、筆者は日本社会事業大学に入学することができた。社会福祉を学び、大学卒業時には留学生代表として答辞を任された。答辞には苦学の中にあっても学ぶことの喜びを盛り込み、先生方や学友が涙と惜しみない拍手で送ってくれた。大学卒業後、引き続き日本社会事業大学大学院に進学し、地域福祉や高齢者への社会サービスを念頭に置いた研究を行った。社会福祉学研究をリードする教授陣の薫陶を受ける学究生活であった。特に、恩師である大橋謙策先生から地域福祉の思想と実践を学ぶことで、福祉に対する目が開かれていった⁵。

各地域の社会福祉施設を参観する機会にも恵まれた。当時の筆者にとって、もっとも印象深かった施設参観について紹介したいと思う。ある障がい者施設の作業現場であった。一生懸命作業をしている人をずっとからかい、邪魔し続ける仲間がいた。作業の効率が落ちてしまい、作業に集中したい仲間の療育を妨げることにもなりうる。このような場合、作業に集中できる人とできない人を別室に分離してしまうという発想もあるだろう。しかし、この作業所の支援員は、「作業できる人と作業できない人の関係性をつくることに意味があるので、分離という選択

はありえない」と教えてくれた。作業の上手な人と上手ではない人が協働する関係性ができるよう、見守りながら待つのだという。効率を優先するのではなく、他者との関係性の作り方を具体的に学んでいく場としても、作業所が運営されていた。約 20 年前の韓国には、大学院における研究生活で学んだような地域福祉実践という概念自体がなく、利用者それぞれの人格を守る社会福祉施設がまだ整備されていない状況であった⁶。

大学院修士課程を修了した後、日本で引き続き博士課程へ進学するかどうか、あるいは帰国するか、もし帰国するとしたらどこかの福祉施設の職員として就職するか等々選択肢は多かった。選択肢があるということは、日本の留學生活で得たものがそれだけ多かったということである。留學中は、建築現場や飲食店、印刷所等でアルバイトをしながら、学部時代に獲得した公益財団法人埼玉県国際交流協会による奨学金、大学院で獲得した公益財団法人ロータリー米山記念奨学会の奨学金で学資と生活費を賄った。在日同胞や日本人がさまざまな場面で応援してくれた。そのような手厚い支援のおかげで、少しでも余裕があれば社会福祉をはじめ、幅広く社会科学の書籍を読み、大学院では専門書を精読したことを前提に進められるゼミナールで学ぶことができた。修士課程修了後、研究を続けたい気持ちも大きかったが、結局、韓国で社会事業を始めることを決心し、事業計画や資金の準備で韓国と日本を行き来しながら奔走した。大学から大学院修了までの長期間、韓国を離れていたこともあり、また小学生の頃からソウル市恩平区内の児童福祉施設で生活していたため、韓国で誰かに事業支援を頼めるはずもなかった。そのような苦境にあって、日本で出会った恩師、学友らが、まだ 30 代で社会事業について何の実績もなかった筆者を物心両面で支援してくれた。そして、小さな社会事業が誕生し、今度は自分自身が誰かを支援する仕事を始めることになったのである。本章の冒頭で触れたように、1997 年からソウル市で高齢者を対象とする在宅福祉サービス事業を開始したのち約 10 年間継続し、2006 年、新たに社会福祉法人幸福創造を創立した。既存の組織の再編と法人登記

の書類作成は大変煩雑な作業であったが、いろいろ調べつつ、独力で新法人を立ち上げることができた。新法人(2006 年 9 月 26 日設立)の設立目的等は以下のとおりである。

(設立目的)

一粒の種が地面に落ちて実るように、キリストの教えにもとづく私たちの奉仕が人々に、夢と愛と光をもたらし、地域社会の発展と人類の福祉推進に貢献することを目的としています。

(理念)

「人間中心」私たちは何よりも人を愛します

「価値志向」最高の福祉価値を追求します

「変化先導」社会の美しい変化を夢見ます

「倫理経営」正義、公正、透明な経営を実践します

「相生融和」相互信頼を尊重し共同の発展を追求します

「国際協力」国際貢献の先頭に立ちます

(サービス目標)

後の世代に美しい社会と文化を継承します

住民参加による福祉教育、福祉文化を創造します

一人一人が尊重され、自立した生活と社会参加ができるよう支援します

信頼できる人材を養成し、安心、安全な福祉サービスを提供します

非営利、公益性、純粋性、サービスの継続性を維持します

専門職としての価値、知識、技術を持続的に養います

(ビジョン)

もっとも信頼される福祉財団

最高の福祉人材養成

責任ある社会貢献と国際協力

これを法人の各事業所に掲示し、新規採用者を対象とする職員研修時にはとくに丁寧に説明を行っている。

本稿のテーマに深くかかわる(サービス目標)の「一人一人が尊重され、自立した生活と社会参加ができるよう支援します」という部分に注目してほしい。筆者が社会福祉の現場で接している高齢者の多くが身体的な不具合や認知症を抱えており、主体的に生を営むことができない方々である。誰かの手助けがなければ最小限の人格と尊厳を守ることができない方々である。そのような高齢者を自分の家族や友人のように配慮しながら、対等な人格として認めあう関係性をつくる努力が福祉という営為である。特別養護老人ホーム園田苑の実践で有名な中村大蔵先生が指摘したように、人間は人間とかかわって人間となりうるということを福祉の現場で痛感している⁷。

ここで重要なことは、ケアを受ける側だけではなく、ケアを提供する側もまた、ケアを通して新たな経験を獲得し、他者に開かれた個人としての尊厳を確認することができるということである。大橋先生のゼミナールで学んだミルトン・メイヤー著『ケアの本質—生きることの意味』によると、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することを助けること」であり、「ケアとは、ケアをする人、ケアをされる人に生じる変化とともに成長発展を遂げる関係を指している」。そして、「他の人をケアすることをとおして、他の人々に役立つ事によって、その人は自分の生の真の意味を生きることができる。「世界の中にあって、自分の落ち着き場所」を獲得することができるのである⁸。

相手への配慮や働きかけが自分自身のよるこびになり、韓国語でいう「昱」となりうるのが福祉の仕事である。日本語で表現するならば天分のような自分の「役割」、さらにいえば決して他人事ではありえない「自分ごと」ともいえるだろうか。ケア関係は、われわれが社会的動物であるということの意味と可能性を教えてくれる。福祉は社会政策であり、問題解決に向けて実働するが、福祉が自分自身の「岔」、つまり日本語でいう命、人生になってこそ、喜びの中で働けるようになるのである⁹。

3. 人とかかわる中での自己確立

大学で福祉を学びたいと強く思ったきっかけがある。留学以前、韓国で児童福祉施設のボランティア活動に出かけた時のことである。食事をしたり、一緒に遊んだりしてしばらく楽しく過ごした後、筆者が帰り仕度をしていたとき、その施設で暮らす小さな女の子が駆け寄ってきて、服の袖をひっぱりながら、また訪ねてきてほしい、そして自分を愛してくれなければならないといじらしい目で嘆願したのである。苦しいほど胸が詰まったその瞬間を、今でも鮮明に思い出す。筆者は2歳の時、慶尚北道栄州で父と死別し、父の顔も何も覚えていない。しばらく祖父母と暮らし、その後家庭の事情でソウルに移り、児童福祉施設で高校卒業まで生活した。当時の施設は、ひと部屋に5、6名の子どもたちが暮らし、上下関係も厳格で、軍隊より大変なのではないかとも思えるような環境であった。もちろん勉強に集中できる環境ではない。週末に出されるゆで卵がなにより美味であったことを今でも覚えている。小学校の高学年から高校卒業まで、もっとも母を必要とした時期に一緒に暮らすことができなかった、そのような自分自身の痛みと共振したということであろう。何気ないボランティア活動で出会った女の子のひとことが社会福祉を志すきっかけとなり、人生の転換点になったのである¹⁰。

ところで、ケアを必要とする人に家族のように、友人のように接し続けるということは決して簡単なことではない。認知症の高齢者ならば、明るい声掛けを心がけることはもちろん、同じ話をずっと聞きながら楽しく過ごし、なるべく応答しやすい会話や質問をすることが福祉専門職の技術として求められる。社会福祉系の授業では必須の技術論であるが、実行しようとする、相当に高度な技術であることがわかる。ありのままに愛し、敬い、理解し、許しながらふつうの生活を支援し続けることは、小さなことでよくよしたり、他者を傷つけたりする私たち普通の人間にとって簡単なことではない¹¹。韓国語の「손길」とは手を差し伸べることという意味である。どのような状態にあっても相手に敬意と関心を向け、そして手を差し伸べることで、先述したよ

うな相互行為的なケア関係の中でケアされる側とケアする側がともに人間らしい存在としてありうるのである。

地域福祉で出会う、支援を必要とする人々は高齢者だけではない。一見何の問題も抱えていないかのように見える人々も、この機関ならば、またはこの人ならばという信頼があるときに、他者に言いづらく、何重にもこじらせてしまった重い問題を打ち明けてくれるものである。そのような場合、専門的なアドバイスで一刀両断することは、何の解決にもならないことがいかに多いか。対人社会サービス(personal social services)にかかわる者は、対象の問題を解決することと対象の問題を解決できるよう支援することの違いを常に意識すべきである。何らかの生活問題を抱えている相談者に対して、性急に解決方法を教えるのではなく、時間をかけて解決方法を一緒に考え、導きだしていくのがわれわれ福祉の現場の仕事である。この過程では、対象者に効率的な対応や変化を要求するのではなく、対象者の潜在能力を信じて「待つ」ということが重要である。過剰に働きかけず、信じて待つのである。これらをケアの倫理ということもできるだろう。支援を必要とする人々は、ほとんどの場合、通常もっていた判断力や行動力が低下してしまっている状態にあり、自分の力で立ち上がることが困難になっている。支援する側の力、すなわち外圧で立ち上がらせるのではなく、判断し、行動する力を回復していくことを支援するということが社会福祉におけるケアという仕事である。

忍耐強く待つ過程では、いったん決断したり、解決できたように見えた問題が、また元の状態に戻ったり、当事者の気持ちが揺らいだりすることがごく普通に生じる。それもまた回復の過程として、支援する側にはその不安定な揺れに寄り添う強さが必要である。福祉、そして教育を行う人間は待つことと耐えることの重要性を知るべきであろう。これらはマニュアルのみでは決して対応できない、人間としての深みに関わる技術であるといえる。逆のパターンを考えるとより明快になるだろう。ケアを行う人間の「正義」を押し付け、あるべき姿を強要し、最

短距離で結果を求めようとすることは父権主義的な暴力にすぎない。その人らしさとは何かを考え、個々人に対応する中でもっともふさわしい支援のあり方を模索していくこと。その試行錯誤の過程で、ケアをする側もケアをされる側も悩みや困惑を共有しながらよりよい方向性を定め、最後まで責任をもって寄り添うこと。これがケアの倫理であり、また実践としての福祉ではないだろうか。

ところで、社会福祉実習ではしばしば不幸な認識のずれが生じる。実習から戻った学生が「たいへん貴重な経験ができた」、「すべてうまくできた」と達成感をもって報告するのであるが、受入先の事業所から「あのような学生を二度と送らないでほしい」とクレームが来るのである。人にかかわる社会福祉の現場では、つねに省察する態度が求められる。

4. 人とのかかわり方を学ぶ場所

筆者が代表を務めている社会福祉法人幸福創造が行っている主要な事業の一つが児童の国際交流事業 Kids' Asian Union(以下、Kids' AU と表記)である。2000年12月、東北アジア児童交流事業として韓国、日本、中国、モンゴル、ロシアの各国代表者が約定を取り結び、2004年に現在の Kids' AU に発展した。いずれかの国を開催地として1年に1度キャンプを行い、そこで「違うことと同じこと」を学ぶ試みである。学校の勉強をする場ではなく、外国語を学ぶ場でもない。キャンプを通じて「アジアの違う国の子どもたちと友達になること」が一番大事なのである。子どもたちは子どもたちだけの方法で「遊び」を通じて親しくなることができる(図2)。

小学生から高校生までの学生たちに加えて青少年スタッフが参加するキャンプでは、料理大会等の文化交流を行い、各国の子どもたちが「食べて、寝て、働いて、遊んで、泣いて、笑う」、つまり一緒に生活する数日間を過ごす中で共感する力を育てている。片言の英語や各国の言葉、そしてサインランゲージを駆使する中で言葉の壁を越えた友情が生まれる。20年近い蓄積のある事業となった現在、かつてキャンプに参加した小学生が大学を卒業し、スタッフとしてキャンプの運営にかかわり、その友情の輪から



図 2 Kids' AU キャンプにて(社会福祉法人幸福創造提供、呉珠瑛撮影、於：ロシアバイカル湖、2017年8月13日)

アジアの青年を取り結ぶ人的ネットワークが育ちつつある¹²。筆者の法人では、家庭で生活することが困難な女子を高等学校の卒業、さらに就職や大学進学に向けて支援するシェルター事業を行っているが、Kids' AU にかかわる青少年、つまり学ぶ機会を十分に持つことができた韓日の青少年が、施設で生活する女子にとっての兄や姉のような役割を担う場面も多い。ケアすることのできる人間をどう育てていくのか。筆者の法人ではキャンプやボランティア等を通して、人間のより根源的な部分に働きかけることで、他者とともに協働できる次世代の人間を育てる方法を試みているところである。

(金玄勲)

5. 学校の罫

文部科学省が 2018 年 12 月に発表した「平成 30 年度学校基本調査」の結果によると、大学・短大進学率は前年度より 0.6 ポイント上昇し 57.9%で過去最高となった。大学進学率だけをみると 53.3%で、やはり過去最高である¹³。18 歳人口はピーク時の 1992 年の約 205 万人から 2018 年の 118 万人まで減少したが、この間、進学率は上昇している。高等教育は大衆化した。

ところで、学生たちは、どのような目的で大学に入学してくるのだろうか。学生たちに尋ねると、就職のため、特に教育学部においては教師等特定の職

業に就く免許・資格を取得するためという反応が多い。免許・資格にこだわらず、勉強したい・学びたいからと答える向学心のある学生も少なくない。学ぶために大学に進学する。これは正しい目的と手段である。ところが、半世紀前、I.イリイチは『脱学校の社会』で学校に行くと学ばなくなると指摘し、真に学ぶためには「脱学校」が必要であるとラジカルに主張した。

「学校化」(schooled)されると、生徒は教授されることと学習することとを混同するようになり、同じように、進級することはそれだけ教育を受けたこと、免状をもらえばそれだけ能力があること、よどみなく話せば何か新しいことをいう能力があることだと取り違えるようになる。彼の想像力も「学校化」されて、価値の代わりに制度によるサービスを受け入れるようになる¹⁴。

授業中に眠ってばかりいる学生が出席回数に執着し、自分の出席状況を担当教員に聞いてくるというケースは多い。このような学生たちはおそらく学ぶために授業に出ているわけではない。可能な限り最小限の関与で卒業のための単位を取得したいので、一種の便法として授業に出席しているのであろう。高等教育を修了したという証明書をより賢く買おうとする消費者行動であるともいえるだろうか。

そのような学生とは対照的に、授業出席には不熱心でありながら向学心に燃える学生たちが半世紀以前の大学には普通に存在していたという。授業に出なくとも授業の内容を読める書籍や資料に当たる。自分自身の勉強では授業や専攻分野を問わず可能な限り読んで、討論する。それがより自由自在な、本来の学びであると考えた教養主義がかつて存在した¹⁵。現在、そのような大学生の学習態度は、大学設置基準と各大学の精緻な単位設計により実質的に否定されている。大多数の学生も教室で提供される知見をより効率的に理解し、単位に交換することを望んでいるようである。Moodle 等、学習支援システムで学生の自主的な時間外学習を活性化し、ポर्टフ

オリオに学習の内容と成果を記録することで大学での学びを実質化・可視化する工夫は飛躍的に拡充してきた。つまり、現実はいリイチの主張のようにではなく、「学校化」は制度と人間の両面でより徹底されてきたということである。その結果、教室でどのような学びが可能となり、どのような学びがスポイルされるのか。筆者が教室内外で経験した具体的なエピソードから考察してみたい。

6. 学び方を学ぶ

「平成9年介護等体験特例法」により平成10年度以降に入学した学生が小・中学校の教員免許状を取得しようとする場合、7日間以上の介護等体験が必要となっている。地域の高齢者施設、障がい者施設等に受け入れていただき、今まで支援が必要な人びとと出会う機会がなかった学生たちにとって貴重な機会となっている。

若い学生たちが福祉施設を訪れ、そこで実習する際にもっとも重要なことは何だろうか。何よりもまず施設の利用者を含め、お世話になる方々へのしっかりした挨拶が大事である。そして、たとえ緊張が続いて疲れているときであっても、常に明るく積極的な態度でいることが大事である。多忙な業務を行いながら学生を指導してくれるスタッフを可能な限り邪魔しないよう、立ち位置や動き方に注意しながら、今何かできることがないのか、周囲の状況に目を配り、利用者の安全に直接かかわることは適時質問・確認しながら、指示されるより先に行動できると立派な実習生である。広義のケアを業務内容に含む教育そして福祉は、対人社会サービスの現場であるが、臨機応変な気遣いと行動が必要不可欠である。

以上のような教科書的説明ならば学生たちはすぐに理解してくれる。ただし、問題は実践である。利用者の安全に直接かかわることなのかそうでないのかを判断し、今その場で必要なことに当意即妙に対応するという事は、経験の蓄積がない場合、非常にハードルが高い。これができない学生が、実習先で表情も暗いまま立ち尽くし、現場の負担となる場合がある。現職の教員も含めて自戒すべきであろう。ただし、そのような三すくみの膠着状況のリスクが

はじめからない現場もある。ホスピタリティに溢れるスタッフと、スタッフ以上にホスピタリティに溢れる利用者が実習生を歓待してくれる施設の場合である。サービス精神溢れるハルモニたちが訪問者や実習生の緊張を解いて、リラックスできるようにもてなしてくれるのである¹⁶。これは人生の艱難辛苦を超えてきたハルモニたちから若い世代への心づくしの贈与(gift)である。ケアをするはずの学生とケアをされるはずの利用者の立場が逆転するこのような場面は、学生たちが自分自身で何かに気づき、成長できるきっかけにもなりうる。

どのような現場も学びの可能性に満ちている。それにもかかわらず、チャンスを目前にしてさしたる反応をしない学生もいる。福祉社会学の授業で実際にあったエピソードである。松山市内に在住する車いす利用の女性がその授業のゲストスピーカーであった。1979(昭和54)年、養護学校が義務化する以前に就学猶予・免除があてはめられ、通いたかった地域の学校に通えなかった話、制約が多い施設での暮らしとそこからの脱出、意地を通して自宅生活に戻った話等々。これらの実体験を泣きながら聞いている学生もいた。授業の感想を書くレスポンスカードには、障害のために学びたくとも学べない子どもがいたということを知った等々、真摯に記述されてもいた。レスポンスカードをそれぞれ提出し終わり、授業後の片づけを終えて筆者とゲストが両手いっぱい荷物を抱えて移動しようとして、茫然とした。われわれのドアの開閉や車いすの移動等に関心を払うことなく、すべての学生が退室してしまっていた。担当者としてあまりに恥ずかしく、ゲストに謝ったところ「こんなもんよ」と逆に慰めてもらったのであるが、今しがたの授業の結果がこれなのかと思うとやり切れない思いでいっぱいであった。

いリイチは、「学校教育の基礎にあるもう一つの重要な幻想は、学習のほとんどが教えられたことの結果だとすることである。・・・しかしたいのいの人々は、知識の大部分を学校の外で身につけるのである」¹⁷と述べている。少しの手助けを必要とする人が身近にいれば手を差し伸べるというような行動は、学校でレッスンする類のものではない。否、そのよう

な訓練こそ学校で行うべき教育であるという見解もありうるだろう。それが万一、修身としての道徳と近い発想で指導内容に盛り込まれるとしたらどうなるであろうか¹⁸。ここではこれ以上立ち入らないが、ともかくも学生たちは動かなかった。学生たちは学校の外でそれらを学ぶ機会がなかったのか。あるいは授業の内容で飽和状態になってしまい、目の前の事態に関心を向ける余裕を失っていたのか。こちらに声をかけるのが恥ずかしかったのか。いずれにしても、今まさに必要な時に自分の手足を動かさない学生たちの現実であった。

ところで、ケアとは他者へと関心を払い、配慮することである。他者を配慮する仕事をする中で、「社会にとって好ましい行動や心が発達する」¹⁹。配慮とは、具体的な行動である。「すなわち、病者、子供、高齢者、不安定労働者、排除された人びと、そして、さらに、すべての個人、環境、制度をも配慮する。それは、人間の場合、存在し、語り、行動する力の発達、維持、回復を助ける活動」である²⁰。

今まさに必要な時に身体が動かなかった学生の多くは、当時、総合人間形成課程人間社会デザインコースが開講していた文献講読と討議からなる演習「福祉デザインフォーラム」に出席し、ケア論を勉強している最中であった。演習の授業自体は期待以上に順調だったのであるが、学生たちは実際には行動できなかった。なぜだろうか。

ここで他者との関わり方に関連する「情けは人のためならず」という表現の解釈の変化に触れておきたい。本来は「人に情けを掛けておくと、巡り巡って結局は自分のためになる」という意味である。しかし、調査によると、約半数が「人に情けを掛けて助けてやることは、結局はその人のためにならない」と解釈しているという²¹。このような時勢であるので、学生たちは学生たちなりに配慮し、差し出がましく手助けをしてしまうと相手の自尊心を損なうかもしれないと懸念し、無関心を装ったのかもしれない。しかし、冷淡な視線でみるならば、単に困っている誰かに関心を払わないことを是とする現代社会の申し子たちなのである。

「ケア」の倫理は、規則や原則の総体なのではなく、一つの実践なのだ。・・・他者への感受性を欠き、主体のあいだに距離を置く社会では、関心の欠如が、むしろ無頓着として社会行動の規範となり、問われることはない²²。

大学は多くの学生にとって、社会に出る一歩手前の孵卵器(incubator)でもある。さまざまな経験を通じて自我を確立する最後のチャンスかもしれない。その過程で他者に働きかけるというよりも、大人から働きかけられることで関係性のつくり方や維持の仕方を体験的に学んでいくという側面もあるだろう。ある年度の「福祉デザインフォーラム」では、現役またはOGの看護師をはじめとする対人社会サービスのベテランの方々にオブザーバーとして参加していただき、文献講読と授業時間外での打ち合わせを前提とした討論を行った。授業ではまずグループワークを行い、その後各班から報告を行う。もっとも一般的な演習の形式であるが、学生たちから予想外の反応が起こり、それが連鎖していった。ふだんの授業や授業外で担当教員に対してほぼ開示することがない、自分自身の身の上や感情をストレートに吐露するリアルで真摯なコメントが続いたのである。患者の状態に感受性を研ぎ澄ませながらその時・その場で必要な処置を、必要に応じてチームで行う現場のベテランは学生たちの感受性をごく自然に解き放ったのであった。

7. 他者に働きかける人間になれるか

ケアをする人とケアをされる人という関係が固定化してしまうと、二者が対等であり続けることは難しくなる。だから、場面場面で立ち位置や役割を変え、多様な第三者が参入する等、関係性のバランスを調整する工夫が必要である。また、家庭における母親のように恒常的により多くのケアを担う人、つまりいつも周囲から頼りにされる人はある種の搾取にさらされるので、ケアする人をケアする仕組みが必要になる²³。十分なケアを受けて大事に育てられてきた学生たちが、自分がしてもらったように他者

をケアできる、他者を配慮する人間へと成長するためにどのような働きかけが必要なのであろうか。

ソウル市恩平区の委託により社会福祉法人幸福創造が運営を行う新寺老人福祉館²⁴では、地域の独居高齢者支援の一環として高校生ボランティアによるレモン生姜茶の差し入れを行っている。温かくしても冷たくしてもらいたいへんおいしいお茶である(図 3)。ほとんど料理をしたことのない学生たちがベテラン女性らによる「新寺青春」というボランティア団体に手助けしてもらいながらレモン生姜茶をつくり、それを独居高齢者の自宅まで届けるという活動である。日常生活の中で出会う機会が少ない学生と高齢者が調理室で一緒に作業する。

それをひと瓶ひと瓶、メッセージとともに美しくラッピングし、閉じこもりがちになる独居高齢者の自宅まで届ける。この配達という仕組みは地域福祉のアウトリーチの一環でもあるが、新しい出会いの場も生み出す。届けられる高齢者にとっても届ける高校生にとっても貴重な出会いである。

ところで日本と同様に、韓国においてもボランティア経験は大学入試の加点ポイントとなる。ボランティアの三原則である「自主性・無償性・公益性」を想起すると、近い将来に迫る大学入試のアドバンテージを獲得するためにボランティア活動を行うということ自体、本来の趣旨を逸脱するのではないかという懸念もある。しかしながら、ボランティアを行う学生とボランティアが関わっていく人々、そして活動が行われる地域のいずれもが活力を得ることも事実である。全体としてみるならば、ケア能力のある人と地域をつくる過程でもある。韓国政府は最低賃金程度を給付する有償ボランティアを含めて、青年層のボランティア活動を積極的に推進している²⁵。

有効なインセンティブの制度化、学校と職場におけるボランティア文化の成熟等をみると、韓国は日本より格段に進んでいるように思われる。ただし、日本の地域においても先進事例はある。例えば、施設を拠点としたコミュニティケアで知られている特



図 3 レモン生姜茶「愛のおやつ配達」(魁生由美子撮影、2019年3月21日、於: 社会福祉法人幸福創造幸福創造老人福祉センター)

別養護老人ホーム園田苑では、ボランティアグループ「園」が記念誌を発行するほど活発な活動を続けている。「園」での活動歴が約30年になったというベテラン女性は、「ボランティアは自分たちの地域をつくる活動であり、自分のための活動である」と語る。園田苑は筆者が福祉社会学の研究を志した出発点でもあるのだが、筆者が指導する学生たちにとっても貴重な学びの場となっている。尼崎市から委託を受けて運営を行うグループハウス尼崎で卒業研究のための住み込みボランティアを志願した学生は、初日から買い出しと調理を担当し、入居者に手作りの餃子をお出しして大変喜ばれた。自分の仕事でどれかの暮らしを賦活し、一緒に楽しむ。そのような経験は学生自身の人生を豊かにする学びとなったはずである。

社会福祉は近代社会の安定を保障するための他者への贈与という側面を持つ。まず自分から他者へ少しの配慮を差し出すことから、助け合いの輪が広がっていく。小さな行動の実践から始めるということが基本であるということ、地域の力を借り、協働しながら、あきらめずに何度でも、次世代に伝えていくことが必要である。

(魁生由美子)

- 1 総務庁「統計からみた我が国の高齢者—「敬老の日」にちなんで—」
<https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1130.html> (2019年8月30日閲覧)
- 2 韓国統計庁 HP
http://kostat.go.kr/portal/korea/kor_nw/1/1/index.board?bmode=read&aSeq=373873 (2019年8月30日閲覧)
- 3 金玄勲「希望の証人」『幸福創造』(通巻第64号)、2016年、p.3.(韓国語)
- 4 呉珠瑛「高齢者のライフサイクルに沿った総合サービスを提供—社会福祉法人幸福創造」日本地域福祉研究所『コミュニティソーシャルワーク』(15)、中央法規出版、2015年、pp.88-90.
- 5 大橋先生には大学院修了以降、現在にいたるまで韓日学術交流等、さまざまな機会にご指導をいただいている。『コミュニティソーシャルワークの新たな展開 理論と先進事例』(中央法規、2019年)等著書、編著は多数あり、日本国内外でのご講演活動も活発である。
- 6 山口幸照「韓国社会福祉法人幸福創造の歩み」日本地域福祉研究所『コミュニティソーシャルワーク』(22)、中央法規出版、2018年、pp.76-78.
- 7 中村大蔵『人は人にかかわってはじめて人となる』関西よつ葉連絡会、よつ葉共済会、2004年、金玄勲「希望の道」『幸福創造』(通巻第67号)、2017年、p.3.
- 8 ミルトン・メイヤロフ(田村真・向野宣之訳)『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版、1987年、大橋謙策「社会福祉におけるケアの思想とケアリングコミュニティの形成」大橋謙策編『ケアとコミュニティ福祉・地域・まちづくり—』ミネルヴァ書房、2014年、pp.1-21.
- 9 21 恩平ニュース(2017年5月15日)「在宅福祉、自分らしく人間らしい生活のための価値実現」(韓国語)
- 10 福祉連合新聞(2018年4月16日)「金玄勲 韓国在宅老人福祉協議会長 老年の幸福創造、『在宅老人福祉』が代案」(韓国語)
- 11 金玄勲「人生のバランス」『幸福創造』(通巻第59号)、2014年、p.3.(韓国語)
- 12 社会福祉法人幸福創造 HP
<http://world-ch.com/?pgCode=0207> (2019年8月30日閲覧)
- 13 文部科学省 HP
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1407849.htm (2019年8月30日閲覧)
- 14 イヴァン・イリッチ(東洋・小澤周三訳)『脱学校の社会』東京創元社、1977年、p.13.
- 15 竹内洋『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003年
- 16 地域の在日コリアン高齢者、子育て、障がい者を支援する NPO 法人京都コリアン生活センター エルフア(2001年認証)では日本国内外の教育機関から訪問者を受け入れている。スタッフ以上に利用者のハルモニたちが学生たちの食事や間食等の心配までしながら、場を盛り上げてくれるという。(香川県隣保館連絡協議会女性職員研修会「共に生きる社会を目指して—ケアから考える新しい社会—」2018年5月11日 於：丸亀市二軒茶屋総合センター) 社会福祉法人幸福創造が運営するデイサービスにボランティアとして参加した日本人学生の場合は、ハラボジ、ハルモニたちから歓待を受けていた(2019年3月26日 於：社会福祉法人幸福創造幸福創造老人福祉センター)
- 17 イヴァン・イリッチ、p.32.
- 18 斎加尚代「毎日放送映像取材班『教育と愛国—誰が教室を窒息させるのか』岩波書店、2019年、pp.12-13.
- 19 ファビエンヌ・ブルジュール(原山哲・山下りえ子訳)『ケアの倫理—ネオリベリズムへの反論』白水社、2014年、p.19.
- 20 ファビエンヌ・ブルジュール、p.87.
- 21 文化庁 HP
http://www.bunka.go.jp/pr/publish/bunkachou_geppou/2012_03/series_08/series_08.html (2019年8月30日閲覧)
- 22 ファビエンヌ・ブルジュール、p.84.
- 23 エヴァ・フェダー・キテイによると「福祉の目的は、依存者をケアすることと同時に、依存労働者が依存関係に参加することによって生じるコストを軽減することである」。(エヴァ・フェダー・キテイ(岡野八代・牟田和恵訳)『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』現代書館、2010年、p.294.) ファビエンヌ・ブルジュール、p.81.
- 24 新寺老人福祉館(<http://sinsa9988.or.kr/>)は会員数約3,100名、うち9割以上に当たる2,900名が語学やパソコンの教養講座や囲碁やダンス等趣味の活動を行う余暇サービスを利用している。会員のうち220名が日本の生活保護に当たる基礎生活費を受給している。46名に週2回、おかずの無料宅配を行っている。同サービスは自費3,500ウォンでも利用可能である。男性の会員数は全会員数の1割程度である。男性の独居高齢者は食事や清掃等、日常の家事に困難を抱える場合が多く、おかずやおやつ等の配達や安否確認の電話は必要不可欠の支援である。(2019年3月29日、於：新寺老人福祉館 イ・ソングジャ館長から聞き取り)
- 25 高橋明美「韓国の高齢者福祉施設におけるボランティア活動の実態とその評価」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』第47巻、2017年、pp.125-136.